
求める萌えはきみに

ポメット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

求める萌えはきみに

【Nコード】

N1044J

【作者名】

ポメット

【あらすじ】

誰からも愛される素晴らしき人格者だった幼馴染との再会。ボクは嬉しくてたまらなかった。しかし、高校の入学式で再会した彼は常に電波を受信しているような変人となっていた。他人の振りを決行するボクだったが、現実には甘くなく彼が起こす騒ぎへとボクは巻き込まれる破目になった……。

プロローグ 再会

彼との再会は実に三年振りだと思う。

長いようで短いお別れだった。ボク自身、再会するなど夢にも思っていなかったので、クラス発表をされた時に、同じクラスに彼の名前があつてとても驚いたものだ。

今日からボクは高校生だ。

悠橋学園ゆうきょうの入学式は、体育館にてとても厳格な空気の中で執り行われる。質より量を目指した質素なパイプ椅子に腰掛けているボクは足が震えるを必死に堪えていた。

しかし予想よりも、新しい学校生活への不安は感じない。今日まで抱いていた不安感が彼の存在によって少し和らいでいたからだ。

彼はとても優秀な人間だった。付き合いがあつたのは小学校までだが、その当時の事を思い返すだけで、彼がどれだけ凄い人間だったのかすぐに理解できた。

頭の回転が速く、よく教師を驚かしていた。卓越した運動能力、そしてカリスマ的な指揮能力を持ってして、彼は所属するクラスを運動に関するイベントではいつも勝利へと導いていた。巧緻な話術は、小学生とは思えないほどの弁論を展開させ、教師に舌を卷かせていた。集会などで生徒代表として彼が語った後、校長が話をする機会が何度かあつたのだが、そのたびに校長は自分と彼を比較したじろいでいた。

といつても、そんな彼のハイスペックな能力を理解できるようになったのは、最近の事なのだが……。それと同時に、髪薄い、幸薄い当時の小学校の校長の不憫さを嘆き哀れんだりしてみた。だが、よく考えてみると、神童とまで呼ばれた彼が在籍していたのだから、

学校の宣伝にはなっていたのだ。そう思うと、校長の苦労はまあ妥当なものかな、と簡単に残酷になれた。

そんな微妙に懐かしい思い出に浸っている間にも式は着々と進行していた。在校生からの歓迎の言葉をもらい、それに答えるための感謝の言葉を述べる新入生代表の名が呼ばれた。そう、代表生徒は間違いなく彼だ。彼――黒澤頼斗だ。くろさわらいと

頼斗は、式の進行役である教頭先生に名を呼ばれ、

「はいっ！」

と昔と変わらない――いや、少し大人っぽくなって凛々しい響きを感じる声で返事をし、椅子から立ち上がった。

頼斗は、長めに切り揃えられた漆黒の髪を弛ませ壇上に上がって行く。スラリと長い手足が目を引きつけた。再会して一番に思ったのは、身長が驚くべきほどに伸びていた事だ。小学校時代は同じくらいだったはずなのに今となっては大きな隔たりができてしまっている。ボクもそれなりに身長がある方だが、彼はおそらく180センチはある。

壇上へと上がり切り、後もう少しという所まで来た頼斗だが、ボクはその姿を見て、思わず笑い声を上げてしまった。周囲の者に睨まれたが、そんな事は気にしない。

遅れて気付き出した同級生たちは、ボクみたく声は出さなかったが、確実に笑いを堪えている様子だった。もちろんそんな彼らを責める気は無い。笑って当然なのだ。

ボクは場の空気が乱れたのを察知し、チャンスだと思い周りの様子を窺ってみた。

更に遅れて、教師や保護者たちも異変に気付き出した。教師も比

較的笑いを堪える傾向にあったが、中には憤慨し、今にも怒鳴りつけそうな勢いの教師も居た。保護者に関してはとても個性的な反応が見れた。疑問符を浮かべ首を傾げたり、扇子で口元を優雅に隠したり、隣の奥様とヒソヒソ話を始めたり、顔を真っ赤にし体育館から出て行ってしまったり――出て行っただのは頼斗の母親だろう。なんとなく姿が記憶に残っている。

一通り周りの反応を確認してから、ボクはまた壇上の頼斗を見上げた。まだぎこちない歩行を続けていた。

何がそんなに笑えるかって、それはもちろん、頼斗が同じ方の手と足を同時に出して、それはもう真剣な顔で歩いていた事だ。

流石に頼斗が演説ポジションに到達する頃には式の参加者はみんな真面目な顔に戻っていた。いや、そうさせられたのかもしれない。

みんな頼斗の姿に見入っていた。

眩しいぐらいの照明を浴びて危なげな魅力を放つ黒髪。確固たる信念を持ち一目で人々を引き込む魔性を秘めた闇色の双眸。凛々しく端整な作りをした顔立ち。悠橋学園の制服である紺のブレザーに包まれたモデル並みに整った体躯。

どれもが人目を引く要因だった。そして、何よりもその圧倒的な存在感とも呼べる、輝くオーラのような体内から溢れ出る生気が目を引いた。第六感を持ち合わせないはずのボクでも、その未知の感覚によって知った。

――次元が違う。

ボクと関わらなかった三年の間に頼斗の身に一体何があったのか、まるで想像が及ばない。

同じ方の手と足を同時に出す奇妙なロボット歩きで掴みが完璧な

頼斗が、そんなギャグテイストな雰囲気を一蹴するシリアスな表情を浮かべた。そして、右手で拳を作り上げ、マイクが乗せられた台を強く叩いた。

その音を受けて僅かに広がり出す潮騒のようなざわめきに何も反応せず中庸な表情を浮かべた頼斗は、教頭の『礼』の指示を無視し、叫ぶように、訴えるように言葉を紡いだ。

「ただの既存属性に興味は無いっ！」

時が止まったような気がした。違うな、ボクが、本能を持ってして現実を拒否したのだ。どうやらそんな思いを抱くのはボクだけではなく、他の人たちも同じようだ。

うん、聞き間違いだよ。昨日はとても緊張して眠れなかったからきっと疲れが溜まっているんだ。

一縷の望みってあるよね？ ボクはそれを信じたんだ。

でもさ、この時に学んだんだ、現実はとっても非情だって。

ボクの僅かな逡巡は通り過ぎ、刹那の沈黙は消え、頼斗の声が体育館に木霊した。

「ツンデレ、ヤンデレ、クーデレ、不思議系、姉系、妹系、電波系、ロリ系、数々の偉大な属性様方には、正直、飽き飽きとしている！だから俺は、新ジャンル、新属性を求めているのだ！ この中に我こそはという者は俺のところに来てくれ！ 以上だ」

続けて叫ぶ頼斗の言葉に、かつての頼斗の面影など微塵も感じられなかった。

某ライトノベルの某女子高生の某セリフに似ていたのはさることながら、入学式でそれも新入生代表として、ぶっ飛んだ挨拶をかま

したのは、それはもう様々な方面への宣戦布告とも取れる迷惑極まりない、随分な出過ぎた真似であった。

ボクは絶望による沈痛な面持ちで、頼斗を見上げた。

頼斗は、皆様方の色々な意味での心配を余所に、実に満足気な様子で降壇していった。

プロローグ 再会（後書き）

以前私が書いた完全に趣味に走った小説です。なので既に書き終わっています。

ちなみに、最初から最後までこのよくわからないテンションで物語は展開されます。

平常な人は多少電波に毒されるので、覚悟をしてから読んでください。著者はこの作品より受ける影響を一切関知致しません。（すみません、ただ言いたかっただけです）

告知が遅いのは私が確信は（ry

電波ゆんゆんがどうした？ どんとこい！ という猛者な方。

これくらいで電波？ はっ！ 余裕だぜ！ という勇者な方。

電波マジ大好物なんですけど〜！ うは！ という手遅れな方。

やべえwキーが止まらない！ w w w w w という通な方。

上記に該当する方は間違いなくこの作品程度では悪影響を受けないので、安心して続きをお読みください。

1話 伝説

その日、生ける伝説となった頼斗は、全学園関係者から要注意人物としてかなり厳重な警戒態勢を敷かれると共に、色んな方面の人から標的とされた。

頼斗によって激動を迎えた悠橋学園なのだが、とても予想外な事態が起こった。何が起こったかというところ、告白という本来は甘酸っぱい青春イベントが発生したのだ。頼斗に言い寄る女子が居た事からして驚きだが、まさか愛の告白など予想外にもほどがある。

ボクは、何人もの挑戦者たちの姿を見て、その内頼斗も誰かと付き合うんだろうな、と考えていた。しかし、ボクは間違っていたのだ。頼斗の妄言は確かに本気だったのだ。

それを知るのは、入学して少し経った頃の事だった。

ある見た目も中身もロリロリな女子生徒が、全校集会の時に果敢にも告白へと望んだのだ。どうしてそんなタイミングで挑んだのかは、学校の七不思議を八不思議にする勢いだったので誰も余り深くは考えなかった。

『黒澤くん、好きです!』

告白現場から位置が近かったボクはもちろんの事、全校生徒が空気を讀んだかのように即座に沈黙した。壇上に上がって話を始めようとする校長先生までも、口を大きくあぐりと開けて呆然としていた。

そのなんとも居心地の悪い沈黙を破ったのは、頼斗だった。頼斗は伏し目がちに反応を窺ってくる女子生徒を見下ろした。数秒の間全身をなめ回すように観察し、ゆっくりと口を開いた。

『ただのロリに興味は無い。きみは、本当に面白みの欠片も無いな。持っている属性からしてロリだけじゃないか。いや、ロリにも成り切れていないか。ロリは大人っぽくする必要など無い。もちろん、背伸びする姿は萌えを生み出すが、見た目相応におたおたした方が俺は好みだ。かといって、ロリはツインテールという固定概念に囚われるのはよくない。需要は高いのかもしれないが、俺はどちらかというと、ポニーテールのが好みだ。意外性を望むなら、ボーイッシュに行くのが一番だろう。新属性を求める俺からしたら、一番嬉しいのは意外性だ。それをよく考え、新属性を模索し、そして挑んで来い』

頼斗は平坦な声で長々と語り、言い終えたのか、何を考えているのかわからない無表情で壇上に立つ我らが校長の方へと目を向けた。勇気ある女子生徒は、ポカーンとしていた。それもそうだろう。ボクだってポカーンだ。あんな大量の電波情報もとい毒電波を零距离で送信されては、もう受信処理が追いつかずフリーズするに違いない。

それから静寂が場を支配し、数秒後、女子生徒の咽び泣く声が空気へと染み入るように響いた。

ボクはその女子生徒に何か言葉を掛けるべきだったのかもしれない。または、とりあえず頼斗に毒電波を日本語へと翻訳するように頼むべきだったのかもしれない。何をするべきか、それすら迷うが、ボクは一つの衝撃により体の自由を完全に奪われていた。

あの妄言は本気だったのか！？

なんというか、どうやら頼斗はボクの予想をまた遥かに凌駕して行ったようだ。人は足りなくてもいいのだ、と今なら断言できる。余計なパーツが加われれば人間は果てしなく壊れていけるのだ。

頼斗は小学生の頃と比べて何も失っていない。あえて失ったといえば、正気だろうか。とりあえず能力的な面では、頼斗は何も失っていない。寧ろ成長しているくらいだ。しかし、オタク文化を知り、二次元知識を得て、新たな萌えを開拓するフロンティア精神が培われたおかげで、もう矯正不可能なレベルの人格破綻者になってしまった。

それからというもの、ボクの絶望と呼応するかのように日本女児たちは素晴らしきチャレンジ魂を胸に秘め、頼斗へと挑んでいった。だが、まあそうそう新属性を持つ女子生徒などはおらず、結果は惨敗であった。

頼斗は告白を受けるたびに、何がダメなのかを一人ずつに毒電波にて説明した。

『きみは、正統派ツンデレという噂があったね。……正直、正統派となると属性に染まり過ぎているがゆえに、変化するのは大変難しい。いや、だからこそ正統派ツンデレは素直になれないという魅力存分に発揮するわけだが、残念ながら俺が求めているのは新属性ただ一つだ。だが、諦める事は無い。正統派とて一歩踏み間違えればヤンデレへと変貌できる絶大なパワーを秘めている。そのパワーのベクトルを変えれば、もしかしたら新境地へと至れる可能性も高い。それをよく考えてみてくれ』

『先生は、もう職業も属性も性格も保健室の先生で染まり切っていますからね。やはり、手っ取り早い解決方法から言えば、職を捨てることです。望みは薄いですが、保健室の先生、というのに新要素などを組み込んで、どうにかするという方法もあります。元々俺は生徒で先生は教師なので、そういう倫理的問題もあるかと思っていますので無理はしないでください』

この二つはほんの一例だ。他にも腐るほど解読不可能な暗号が存在する。残念ながら、ボクの脳という記憶媒体が保存を拒否したので他は記録されていない。

告白を一回で諦める者がほとんどであったが、中には毒電波をよく吟味し、何度も挑む生徒も居た。しかしそんな頑張り過ぎる人の中には、度重なる毒電波に脳の回路がショートしたのか、ヤンデレへと変貌する者も居た。確か、三須先輩という人が刃物まで持ち出していたという話だ。

また、保健室の先生が突如辞職へと踏み切ったのは頼斗が原因に違いない。

そんな暴走気味な頼斗は、入学して三ヶ月ほどで女子百人切りという偉業を成し遂げると共に、『女殺し』の異名を得た。

色々と文句は言ったが、ようするに頼斗は皆の人気者だ。きっと、ボク以外の者はそこまでの変人的部分を気にしている者は居ないと思う。悠橋学園にオタク文化が蔓延り始めたので、ボクのような人間のが少数派だ。将来、日の目を浴びる生活を享受したいと願う一般人なのだが、オリコンランキングにアニソンが出てきたり、国民的ニュース番組にサブカルチャー用語が出始めた事から、日本の暗い未来を示すと共に、ボクのお先も真っ暗だと暗示されてしまっている。

日本の迷走へと不安を抱きつつ、頼斗の暴走に辟易しながらボクは今日も学校へといくのだ。

二学期の初登校。ボクはそんな頼斗の伝説というプロモーションビデオ的な雰囲気の一学期の思い出を振り返り、少し憂鬱になった。九月の日差しはまだ強く、徒歩での登校をするボクは額に滲み出てくる汗を拭いた。海から運ばれてくる潮風のせいで、汗ばんだ肌がべとべとする。それに喧しく蝉が鳴き続けているのも煩わしい。

「だるい……」

晩夏の太陽を睥睨しながら、ボクは呟いた。

「徒歩で七分なんだから文句を言うな。自転車の奴らなんてこんな暑い中を三十分ぐらい掛けて登校するんだぞ」

「あ、そ」

ボクは隣のうるさい奴に適当に答える。そして、見え始めた悠橋学園の校門に溜息をついた。あそこを潜ればまた騒がしい学校生活が再び訪れるのだ。

はあ、一体ボクが何をしたっていうんだろうか？ 神様が居るのなら是非ともその理由を問いただいたいものだ。

「どうしたよ、夏休みは暇だから学校のが楽しいって言ってたじゃないか」

「……………」

とりあえず隣のうるさい奴は無視する。ついでにそっぽを向く。

「っておい、無視すんな！ 俺が何かしたのか？ それともなんかあったのか？」

うるさい奴はやっぱりうるさいので、ボクは仕方なく目を合わせてあげた。

「なんでもない」

短く答え、ボクは青い空を仰いだ。輪郭のくっきりとした雲が優雅に空の海を泳いでいた。その何にも縛られない自由さが、ボクの胸を締め付けた。

「……いつも以上に意味がわかんねえぞアキラ」

うるさい奴がなんかセリフを吐き捨てたが、あえて反応してあげない。言葉を返すとすぐに調子に乗るのだ。子どもに物を与え過ぎてはいけないのと同じ要領だ。必要以上に反応するとすぐに付け上がる。

二学期の初登校。ボクはうるさい奴——頼斗と行く。

どうやら幼馴染という因果は、うまく断ち切れなかったようだ。本当に神様は罪作りだな。これが運命だというのなら、過酷過ぎる。

2話 昼食

登校を終始憂鬱な気分で終え、堅苦しい始業式やら退屈なLHRやらが終了し、昼休みを迎えた。午前中の怒涛の日程を乗り越えたクラスメイトたちはどこかぐったりとしている。特にボクみたいな帰宅部の者は夏休みボケが強いので余計だろう。

昼休みといえども騒がしいものだが、嬉しい事に頼斗がたくさんの女子生徒を連れて教室から出て行ったし、男子はほとんど購買の方へと行っている。逆の気味が悪いくらい静かだ。長くは続かない平穏をボクは噛み締める思いで享受した。

ボクの席は窓際の列の一番後ろという恵まれた位置にある。それに教室が三階なので、休み時間であろうと授業中であろうと空を眺めたり町を見渡したりできるのだ。空を見るのは好きなので、この席は気に入っているのだがそれでもわがままはある。悠橋学園の東側には雄大な海が広がっている。しかし、残念ながらボクの席から一望できるのは反対側の西、見渡す限り退屈な町並みが続いている。

空を眺めるのも町を見渡すのも飽きたボクは、力無く机に突っ伏した。空を見れるのはいいのだが、その分、日差しを直に浴びるというデメリットもある。だから非常に暑い。といっても今はカーテンを閉める気力が湧かない。

考えるのもだるくなってきたので、ボクはもう全身から力を抜いてぐったりとする。

ふと、突き刺さるような日差しが弱まるのを感じた。太陽が雲に隠れたのかな、と最初は考えたが、先ほどの空の観察から雲の流れを想像するに、それは有り得なかった。そうなると親切な誰かが力

カーテンを閉めてくれたのだ。

ボクは体を起こしてその人物を確認した。カーテンを引いてくれたのは、予想通り姫野さん^{ひめの}だった。姫野さんは、ボクが起きるのを見て、少し申し訳無さそうに微笑んだ。

「起こしちゃいましたか、すみません」

潤んだ円らかな瞳が妙に嗜虐心をくすぐる。姫野さんはある種の奇跡を体現した究極のロリっ娘^こだ。そのちんまりとした体つき、小学生にまぎれても気付かれないであろう幼顔、幼女成分を強めるふあふわと波打つ首下辺りまで伸びた髪、そしてそれらに相反した制服を盛り上げる巨乳――一言で表せば巨乳幼女というやつだ。

「気にしないでいいよ」

ボクは姫野さんに微笑みを浮かべながら言葉を返してあげた。そうすると、安心したのか姫野さんは豊かな胸に手を当ててぽつと吐息を漏らした。

そのまま自分の机の方へと戻っていくと思ったのだが、姫野さんは足を止めてボクをじっと見てくる。緊張しているような様子なのは気のせいだろうか？

「あ、あの……」と安定せず震えた声を出す姫野さん。「えっと、そのお……もしよかったら、お弁当……一緒にいいですか？」

もじもじとする姫野さんが可愛くってボクはちょっと呆けてしまった。慌てて口元を拭うと涎が制服の袖に付着していた。

「も、もちろん」

ボクは紳士（真摯）に言った。オプションで歯がキラリと輝くという事は無かった。未熟な紳士のテクニクだったのだが、姫野さんには効果抜群らしく一瞬で顔を茹蛸のように真っ赤にさせた。

「あ、ああありがとうございます！ふっ！」

きっと最後の「ふ」は「す」と言いたかったのだろう。あはは、可愛いな。っと不味い、また涎が。ダメだな、可愛い子を前にすると涎が出る癖はどうにかしないと。

「どういたしまして」

ボクは紳士的スマイルの模倣品を浮かべ、お弁当を取りに自分の席へと一旦戻る姫野さんを見送った。

スキップでも始めてしまいそうなほど上機嫌な様子で姫野さんはボクのもとへと戻ってくる。ちょうど前の席の人が別の場所で昼食を取っていたので、その椅子を借り、ボクの机の方に向けて、向き合う形で座った。

「えへへっ」

眩しいよ。可愛過ぎて直視できない。って落ち着くんだ、ボク。目の前で涎をたらしてはあはあやってれば流石に不味い。

ボクは深呼吸をしながら鞆からお弁当を取り出した。

包みを開けて、二段重ねになっているお弁当箱を机に並べる。姫野さんは同じようにお弁当箱を開けて待っていた。

「……ん？」

どうして食べ始めないのかは疑問に思ったが、更にお弁当へと箸を伸ばそうかと思っていた時、ボクは姫野さんの視線に気付いた。

「えと、その……あの」

もごもごと口の中で何度か繰り返されてから、その言葉はやつとの事でボクに聞こえる声となった。

「いただきますを……一緒に」

すぐさま鼻を右手で押さえた。ドピュツて音が聞こえた気がする。不覚にも興奮により鼻血が出てきた。

「え？ あの、だ、大丈夫ですか？」

「ノープロブレム」

ボクはズボンのポケットからティッシュを取り出し、すぐに鼻に当てた。お弁当を守るために犠牲になった哀れな右手は、血に塗れ猛々しい雰囲気醸し出していた。

「ほ、保健室にっ！」

「ノープロブレム」

自分の緊急時における貧困なボキャブラリーに絶望した。しかし、焦ってしまうのはしょうがないのだ。姫野さんとの昼食イベントをこんな事で終わらせるわけにはいかない一心がそうさせるのだから。

「で、でもお……」

姫野さんの優しさが胸に突き刺さる。ごめんなさい。貴女が可愛過ぎるから悪いんです。それにしてもこの血、いつまで垂れ流しになるんだろう？

無駄とわかっていても、ボクは床に膝立ちし頭の上で両手を組んで、鼻血が止まるように必死になって神へと懇願した。

神様、ボクに慈悲を！　　というか、頼斗に苦しめられた分ぐらいの幸せをよこせ！

「おうっ！？　もう止まったから大丈夫だよ。それじゃあ、一緒にいただきますを言おう」

ボクの気持ち（恫喝）を汲み取って（恐れて）くれたのか、鼻血がピタッと止まった。後に残るスースーする感覚はちよつと気になるが、これで姫野さんとの昼食を楽しめる。

「あ、は、はい……」

再び茹蛸のようになる姫野さんに苦笑しつつ、ボクは席に戻って手を合わせた。ボクに倣い姫野さんも豊満な胸の前で手を合わせる。

「それじゃあ」

とボクは言い姫野さんと目を合わせる。そして二人で声を揃えて、

「いただきます」

やっと食事を開始する事ができた。本当に一苦労だった。

ボクは自分のお弁当を突きながら、姫野さんを観察する。ちまちま食べる姿が小動物的でなんとも可愛らしい。

ふしだらな自分を戒めつつも、自然と視線は顔か胸に定まってしまふ。ああ、あの胸に顔を埋めたい。両手で堪能したい。それは叶いそうに無いので、ボクは自分の胸を掴んでみた。いや、掴めもしないけど……。なんとも切ない代償行動。寧ろ悲しさが増した。と、いかどうしてそんな事をやろうと思ったのか、三秒前の自分に問いたい。

姫野さんがボクの奇行に目を丸くする。

はあ、とボクは溜息をつく。男は誰しもきつと姫野さんの胸を見てしまうのだ。皆同じなのだ。やっぱり大きいのがいいのだ。

「笹風さん、えっとどうしたんですか？」
ささかぜ

大不況へと嘆く失業者のような陰鬱な面持ちでいると、姫野さんが困ったように眉を寄せてボクの顔を覗き込んできた。

「ノープロ……だ、大丈夫だよ」

三度目の過ちは何とか防げたが、顔が近付いた事に緊張してしまひなんとも説得力の無い返答になってしまった。そのせいで姫野さんの表情はますます曇ってしまった。

「やっぱり、保健室に行った方が……。わ、私が、その付き添うので……」

「いや、大丈夫。ちょっと寝不足でね、少し頭痛がするだけだから。昼食を取ったら少し寝るよ。それだけで十分だと思う」

「わ、わかり……ました。で、でも無理はしないでくださいね。少

しでも辛いと思ったら、すぐに言ってくださいねっ」

「わかった」

やっぱり姫野さんは心配性だ。それが今はとても辛かった。寝不足というのは嘘ではないのだが、なんとなく姫野さんを騙しているような気がして遣る瀬無い気分になった。

そのまま微妙に居心地が悪い昼食が続くと思っていた。だが、廊下から聞こえる黄色い声の接近により、その暗い未来は否定された。感謝するよ、頼斗。今だけはね。

「あああ！ わかっていないな！ 俺はな、ロリっ娘で巨乳というジャンルには飽きているんだ！ 胸は確かにギャップを示したりするのに便利だ。だがな、巨乳なロリっ娘は既に大量に居るんだ！ 希少価値ゼロで、新属性でもなんでもないんだよ！」

暗鬱になりつつあるボクだったが、キヤイキヤイと騒がしい女子の集団を引き連れた頼斗の帰還によって、幾らか気分がましになった。更にはボクの杞憂まで晴らしてくれた。

廊下で袖にまとわりつくロリ系少女を振り払いながら頼斗は、集まる女子たちにどんどん毒電波を送信していく。毎度毎度まめな奴だ。そんな一人ずつにきちんと説明しなくてもいいだろうに。どうしてそんなところで律儀になるんだろう。

すべての処理を終えた頼斗は、洗面を浮かべたままボクと姫野さんの愛の巣……じゃなくて、昼食を取るところまでやってきた。ボクの顔を見てちょっとだけ表情を緩ませた。その緩んだ箇所を埋めるようにニマリと気味の悪い笑顔成分が足された。

「アキラ！ 放課後は教室で待ってろよ！」

「えええ、だるいからやだあ」

ボクは言動で露骨に拒否を表す。少しだけムツとしたように眉を吊り上げた頼斗だったが、すぐに笑みで怒りを取り繕った。

「まあそう言うな、絶対に後悔させないから。だから、待ってろよ」

そう言われてもな……。ボクは頼斗の突然の襲来でどぎまぎする姫野さんを観察しつつ返答を考えた。頼斗が絶対、と言った時は本当に絶対なのだ。それは経験上理解している。しかし、その経験が小学校時代のものなので、今一信用できない。という事はやっぱり、

「やっぱ、だるいからいい……。ってあれ？」

「あの、黒澤さんなら、もう走って行っちゃいましたよ」

頼斗を見上げようとしたのに、その姿を発見できなかった。戸惑うボクに姫野さんは優しく教えてくれた。

「あ、あああ……。面倒だからいいか」

追い掛けて言おうと思ったが、やっぱり億劫なので諦めた。それに、姫野さんのお昼のが優先度は上だ。

食事に戻るボクに姫野さんは何かいいたげだったが、目を合わせると、「はう」と可愛らしく呟き俯いてしまった。いやはやポケツトティッシュは今度から多めに持ち歩こう。まあこれからも食事を共にできるかどうかはわからないけど……。

「ん……？」

姫野さんをとろけた瞳で見つめ続けていると、どこからか余り好意的とは言えない視線を感じた。それはまるで獲物に飢えている肉食動物が放つ飢餓感を伴った獰猛な殺意のようなものを宿していた。しかし、周囲を確認しようと思った頃には、その奇妙な視線は既に感じられなかった。

3話 部屋

山の陰に沈み掛けた夕日に近い空と、夕日から距離がある空はオレンジ色の明暗により色彩の層をつくってコントラストを演出していた。どこか哀愁を感じさせる夕日と、一日の別れを告げるようなひぐらしの鳴き声に胸が苦しくなった。ボクは夕日から目を背けるように視線を少しずつ下げていき、人工の光を灯し始めた寂しい商店街を見下ろした。

ボクが小学生の頃には、もっと活気がある通りだった。こんな黄昏時には夕食の買い物に来た主婦で溢れ返るほどだった。なのに今ではシャッターを下ろしている店のが多く、人の姿もまばらだ。

町は変わっていく。そして、そこに住む人も変わってしまうのだろうか？

ましてや、故郷を離れた者は、その本質を大きく変えてしまうのだろうか？

「なんて、哲学的な事を考える柄じゃないな……」

ボクは机に突っ伏して、怠慢を貪り続けた。それもこれもすべて頼斗が悪い。放課後は待たない、と言おうと思ったのだが、結局タイミングが見付からず別の意味で待つ羽目になった。遅くとも三十分もすれば来るだろう、と考えていたのだが、HR終了後教室から飛び出して一時間ほど経過した今でも頼斗が戻る気配は無い。

「だるいな」

一度体を起こし、大きく伸びをする。

ふと、自分のまとう制服に意識がいった。なんら変哲の無い紺色

のブレザーに紺色のスラックスだ。無意識が気にした事はおそらく女子の制服の事だと思う。

悠橋学園は県内有数の進学校であるが、私立ゆえに運営側の趣味が物凄く服装やら行事やら校風やらに影響している。その一つが、女子の制服だ。本来ならば長くて嫌がられるスカートも悠橋学園では反対だ。短過ぎて困るのだ。更に、ニーハイソックスの着用が義務付けられている。要するに、学園側は絶対領域を求めているのだ。

せめてもの慰め（あるいは批判からの言い逃れのため）なのか、女子生徒は男子と同じスラックスタイプの制服を選ぶことができる。といっても、ほとんどの生徒がスカートを選択する。

この事から、頼斗の妄言によってオタク文化が爆発的に広まる下地は整っていた事がわかる。中学時代にもう少し真面目に学校選びをするんだったな、と非常に後悔している。

本当に困ったものだ。どうしてボクは悠橋学園に来てしまったのだろう。夢に見た学園ライフはもっと輝かしく、貴いものだったのだが……。現実は厳しいという事か。

自嘲気味に鼻で笑い、ボクは暮れなずむ空を見上げた。

「なにそんなおっさんみたく哀愁を漂わせてんだよ？」

「黙れ下郎」

「なっ!？」

ちょっと前から背後に立つ頼斗の気配には気付いていた。だけどあえて無視していた。

「待たせたのは悪いと思ってる。本当だ。でも、後悔させないのは絶対だから、な？」

なにが、「な？」だよ、この野郎。

鞆を肩に掛け、ボクは椅子から立ち上がった。すると、背後に控えていた頼斗が慌ててボクの肩を掴んでくる。

「ちょ、待て！」

「きゃーこの人痴漢ですー」

ボクは肩に乘せられた手を乱暴に払ってドアの方へと歩いていく。

「待ってって！ そんな棒読みで言っても誰も助けに来る訳がないだろう！ ってそんな事はどうでもいいんだよ。いいから、帰るな」

頼斗がボクの肩を再び掴んだ。くそ、無駄に成長した手足をしやがって。

「放せこの手長猿！ ジャングルに帰れ！」

「いや、俺の故郷はここだし！ 第二の故郷は秋葉だし！」

「じゃあ第三の故郷としてアマゾンのジャングルを加えておけ。そしてボクは帰る」

縄抜け術をもってしてボクは頼斗の魔の手から逃れた。自由を得たボクは全速力で教室からの脱出を試みたのだが、やはりスペックが段違いのようだ。ボクが一步進む内に頼斗は三步進むほどの性能を持つ。

ボクはそれでも諦めずに走った。だが、まあ結果は予期していた通り、廊下にて捕縛された。どこから出したんだろうな、この縄。頑丈な作りをしているらしく強引に縄を抜けるのは無理のようだ。

「ふっふっふっ、もう逃げられんぞアキラ」

「完全に言動が悪役キャラだな……」

ボクは運命に屈服し廊下の床に座り込んだ。床が地味に冷たい。そんな惨めなボクを頼斗が凶悪な笑みを浮かべつつ見下ろしていた。

「言う事を聞けばこの縄を解いてやろう」

ボクは完全に悪人面を顔に貼り付けた頼斗を気だるげに見上げた。

「お願いではなくて、もう脅迫なんだな」

「いや、純粋な取引だ」

「どこら辺が？」

「言う事を聞けば、縄を解くというところがだ」

「……どちらを選んでもボクに利益が一切無いのは気のせいかな？」

「気のせいだ」

どうやら頼斗の持つ常識やルールは、ボクのそれと全く異なるものらしい。昔から少し強引なところがあつたが、こんな無茶をされた記憶は無い。

「はあ、やれやれこんな子に育てた覚えはないんだけどな」

ボクは入学式の時に顔を真っ赤にし体育館から出ていった頼斗の母を思い出し、そんなセリフを呟いた。

「いや、あんた誰だよ？」

「まあそんなネタはいいんだ。とりあえず、もう少し頭を使って考えてみてくれ」

「何をだ？」

「この状況をだ」

ボクがそう言うと、頼斗は腕を組んで真剣に何か考え始めた。

「サッパリだな」

「見事な回答だよ……。頭を使ったのかさえ疑問だな」

ボクの言葉のどこら辺にテンションが上がる要素があったのかは不明だが、頼斗は一番星を見つけてはしゃぐ子どものように瞳を輝かせた。

「ふっ、愚問だな！ 俺は文より武に生きる男、頭はヘッドバット以外には使わない！」

文武両道プラス変人口ードをまっしぐらしてると思うが、どうやら頼斗は自分の事を武に生きる人間だと思っているらしい。人間と

は摩訶不思議な生き物だ。でも、考えてみると頼斗は運動のイベント以外には余り燃えていなかった気がするな。

「それでどうやって解決する気なんだ？」

「ん？ それは、こうやって」

何やらボクに頭を向けて振りかぶろうとしたので、

「止めろ！ 実践しないでいいから！」

と必死になって制止を掛けた。見捨てられた子犬のような顔をされたが、ボクには的確な返答が浮かばない。

関われば関わるほど頼斗に幻滅していく。

懐かしき、幼気なきみ、何処かな。

よくわからない自由律俳句が読めてしまうほどに残念な気分だ。これでボクが自暴自棄になってもきつと許される気がする。だから、これからの暴挙をどうか見逃してくれ。

「はぁーわかったよ、この後付き合うから縄を解いてくれ。もう勝手にしろ」

ボクは軍門に降り、頼斗の言い成りとなった。残酷な神様が余りの不憫さに慈悲を授けてくれる事を祈って……。

頼斗に連れられて向かった先は、特別棟だった。教室や職員室、生徒会室などがいわゆる本館にあり、この特別棟と呼ばれる場所には主に文化部の部室がある。築何年か非常に気になる木造の建物だ。ついでに耐震強度も気になるところである。基準を満たしていないような気がしないでもない。今だって廊下を歩くだけで、ギシギシと何やら危険な呻きが聞こえる。

一抹の不安と、最悪な未来への絶望を胸にボクは頼斗の一步後ろを歩く。

頼斗はボクとは違いまるで遠足に行く小学生のようなハイテンションである。何かのアニソンを口ずさむほどだ。

ボクは床の軋む音と頼斗のアニソンの奏でる不協和音に辟易としつつ、目的の場所まで歩いた。三階の北側の一番奥にある空き部屋の前で頼斗は足を止めた。

「アキラ、ドア開けてみるよ」

中世ヨーロッパ風の異世界を舞台にしたRPGに出てきそうな古びたドアを指差して、頼斗は不敵に笑った。

自分で開けるよ。というテレパシーを送ったのだが、どうやらボクと頼斗の間には以心伝心能力は無いらしい。

「どうした？ 早く開けるよ」

頼斗が急かすので、ボクはやれやれと肩を落としつつドアノブに手を掛けた。そのまま気が変わらないために間髪を容れずドアノブを捻り、ドアを開け放った。

「うわ……」

ドアの向こう側には凄惨な光景が広がっていた。

乱雑に置かれた用途不明の物体群。部屋の四隅にはすべて蜘蛛の巣が張り、ドアの真正面にある部屋唯一の窓には気味の悪い謎の文字が赤いペンキで描かれている。無造作に置かれた机によってさながら迷路を演出していた。床には埃の層までできてしまっている。

「ここって、元々は何部が使用してたの？」

恐る恐る中へと踏み込むと、一步進むごとに埃が宙に舞った。

「あゝ三年前まではオカルト研究部が使っていたらしい」

頼斗の言葉にすぐに納得がいった。散乱している用途不明の道具をよくみると、呪いに使うようなものばかりだ。よくもまあここまですべて集めたものだ、というぐらいに不思議アイテムの山が幾つも形成されている。

ボクはしゃがみ込んでその道具の一つを手を取った。

「……これって確実に人を呪い殺すための道具だね」

手に取ったのは、人を形取った藁人形だった。藁人形にはまるで着せ替え人形に服を着せるみたいに『呪』と書かれた白い紙が巻かれている。よく見ると人間の頭部に当たる部分に髪の毛が埋め込まれていた。それが落ちていた付近にはたくさんの釘も落ちていた。

「怪しい事をやって学校側に潰された部活って聞いたよ」

ボクが部屋内の異常さに身震いしていると、頼斗もまた自身の抱いていた想像の範疇を超えていたのか、部屋の惨状に息を呑んでい

た。

「怪しい事、ね。そりゃあこの藁人形は不味いよ」

ボクは背筋が粟立つのを感じてその藁人形を元の位置に戻しておいた。

「それで頼斗、ここで何をするつもり？」

「ふふっ、教えてほしいか？」

「帰っていいか？」

「いや、ちょい待て！ 説明するから」

慌てて取り繕う頼斗であったが、既にボクのやる気はゼロだ。

まあここまで来たのだから最後まで付き合うけどね。後々文句を言われるのも面倒だし。

ボクは後ろでごちゃごちゃ言っている頼斗を無視し、窓の方へと行く。今にも外れそうな窓を開け空気の入れ替えを試みた。外から入ってくる風に埃が吹き荒れる。

頼斗はボクに無視されている事に気付いたのか、それとも説得を諦めたのか、難しい顔をして部屋内を眺めていた。

ボクは窓を開けた後、掃除用具を探した。もしかしたらどこかに埋もれているかな、と考えたがドアのすぐ側に掃除用具入れを見つけた。中を見ると、ぼろぼろなほうきが一本だけ入っていた。

「ま、無いよりましか」

そのほうきを、部屋内を見渡して何やら吟味する頼斗へと差し出した。

「ん？」

何を意味するのか理解できないのか、頼斗は首を傾げてキョトンとした。ボクは笑顔を浮かべて頼斗の胸へとほうきを押し付ける。

「働け♪」

4話 会議

部屋の掃除は頼斗の頑張りにより三十分ほどで終わった。といってもボクが面倒だから切りのいいところで区切ったのだ。

一通り埃ははき出して、迷路を形成していた机と椅子を部屋の中に二つ向かい合う形で配置した。それ以外の机とオカルトグッズどもは勝手に処分していいのか判断が付けられなかったので、隅にまとめて放置した。

ボクは頼斗に、話は長くなるから、と言われ仕方なくまだ埃っぽい椅子に腰掛けた。ボクがドアに近い方で、頼斗が窓に近い側の椅子に座った。

「それで、ここで何をするの？」

重労働（三十分の掃除）のせいで体力と氣力を根こそぎ持っていかれたボクは、汚いとわかっていても倦怠感には勝てず、埃っぽい机に突っ伏した。

「ん？ もちろんアキラの想像通りの事だ」

何も想像してないんだけどな。どうやらボクと頼斗の間には決定的な認識の齟齬があるようだ。ボクは体を起こし表情を窺った。瞳が、アキラならわかるよな、と訴えていた。

ボクが頭の上に幾つもハテナマークを浮かべていると、頼斗は「よろしい、そろそろ始めよう！」と無駄に叫び、椅子の上へと立ち上がった。そして意味も無く拳を振り上げ、天（天井）を突き、雄々しく叫んだ。

「第一回新属性模索会議の開始をここに宣言するっ！」

「……はい？」

思わず間拔けな声を上げてしまった。頼斗はボクをも毒電波で犯そうというのか？

椅子の上から見下ろしてくる頼斗は、実に生き生きとした笑顔を浮かべていた。そんな顔でウインクされても反応に困る。

「ごめん……状況が全くといって理解できないんだけど」

「なーに単純な話だ。俺とオカルト部の部室改め新属性研究部の部室にて、新属性について語り合うのさ！ 素晴らしいだろう？」

どこに素晴らしさを見出せばいいのかボクにはわからない。テンションについていけず呆然としているボクを置いてけぼりに、頼斗は椅子の上に立ったまま会議の目的について意気揚々に語り出した。

「人類は常に萌えというのを求め、飢えている。別に三次元では愛されない悲しい連中ばかりが二次元へと走る訳ではない。確かに昨今の日本では、『三次元なんて要らないと思います』という言葉の本気で口に出している人間も居るが、そんなのは稀だ。リアルの間人もいけるけど、二次元も欲しい！ というのが人類の大半を占めている。そう俺の直感が訴えている」

直感かよ。なんとも説得力の乏しい根拠だ。こんな人間に成長してしまつて、小学校の校長が今の姿を見たらきつと失望の色を隠せ無いどころか、溢れる涙を止められないはずだ。

ボクの失望が濃厚になると対極に頼斗の独壇場であるオタクトークのボルテージは熾烈を極めていった。

「萌えを求め続け、ツンデレやヤンデレなどの属性という概念が生まれた。いわゆる、萌えの対象をキャラ自体というより、性格などのある種のカテゴリーに求める傾向が現れたのだ。人々はそれぞれに自分の好みの性格や特性——属性を持つようになった。それにより、語呂の良い呼び方というのが属性には求められた。ツンデレとしてその名称がつくまでは、長々と説明文のように語らなくてはならなかったものだ。つまり、新属性とは新しい性格なども示すが、既存の性格に新たな名称を与える事も含まれるのである。この会議では、基本的には既存のものに新たな名称を与えるという事を目的に活動したいと思っている」

「……それにボクも参加しろと？」

「そうだっ！」

とりあえず熱意は伝わってきた。同調する気にはこれっぽっちもなれないがね。

「まだ語りたいところだが、そうしていたら本題に入れないので続きは明日にしよう」

「明日もあるのか!？」

素っ頓狂な声を上げるボクをスルーしつつ頼斗は椅子に座り直した。

「それじゃあ会議を始めようぜ！」

どこまでも我が道を進む気らしい。頼むから他人を巻き込まず一

人で突っ走っていった欲しいものだ。

絶対に後悔させない、という頼斗の言葉が頭の中でグルグルと回り始めた。

「一体……何をするんだ？」

ボクは眩暈と頭痛を感じるのを額に手を当て考える振りをして誤魔化した。

「まずは簡単に属性について語ってやるよ。そうしてから新属性について考えよう」

頼斗は頬杖を突いて、ん〜と唸り出した。何も考えなくていいからボクを帰らせてくれ。

しかし、ボクの願いは天邪鬼な神様によって逆の結果を生み出した。ポンッと手を打って頼斗が何か閃いた事を示した。

「やっぱり例えとして使うならツンデレだな。アキラでもツンデレぐらいわかるよな？」

無視していても帰宅が早くなる訳ではなさそうなので、ボクは一応会話はする事にした。

「ツンツン頭の戦闘狂がデレること？」

「違うっ！　なんか該当する人居るけど違う！　ツンデレといってもまだ細分化できるから正しくはないんだが、要するに人前ではツンツンとした態度を取り、好きな人と二人つきりになるとデレデレとしてくる奴の事だ」

「……………」

「どうしたばおーっとして？」

「なんでもない」

頼斗は気付いているのだろうか？ 気付く訳がないか。今となつてはその方が嬉しい。

「とりあえず属性っていうのはわかったよな？ ツンとデレの態度を要約して、ツンデレって呼ぶんだ。そんで今日の会議はこれから俺が考えた新属性を言うからそのイメージと一緒に作って欲しい」

頼斗は制服の胸ポケットから青色のメモ帳を取り出してページを捲った。目的のページが見つかったのか、手の動きが止まる。

「えーと、まず一つ目は、『腐幼女』だ！」

「ふようじょ？ なんだその怪しい響きは」

ふふん、とナルシスト的に鼻で笑い頼斗は説明を始めた。

「腐った幼女、と書いて腐幼女だ。腐女子という言葉があるだろう？ そこから連想して考え付いた属性さ。腹黒な幼女、巨乳幼女、変態的な幼女とかはよく居るけど、BL好きの幼女って居ないような気がするんだよ！」

イメージ映像として姫野さんがやおい本を読んで興奮する姿が浮かんだ。

「それに需要はあるのかな？」

ボクは先ほどイメージした姫野さんから考えるに、BL好きの女を男が好きになるとは余り思えなかった。

「盲点だったぜ！」

なんて死角が広い奴なんだ。というより思慮が浅過ぎるだけなのかな。

頼斗は悔しそうにメモ帳の、おそらくは腐少女のページを破り捨てて、オカルトグッズの山へと投げ込んだ。さらば腐少女よ、呪いの人形たちとお幸せにな。

捨てた事で未練を完全に断ち切った頼斗は、すぐにテンションを上げ直した。本当に起伏が激しい奴だ。いや、情緒不安定といった方が正しいな。

「次のやつはさっきのとは比べものにならないほどの傑作だ。その名も『ツンツン』！」

「つんつん？ デレは無し？」

「そうだ」と自信満々に頷く頼斗。「もうデレの無いツンツンラッシュュ！すべての主人公を絶望の淵へと追いやるぜ！」

「ちょっと女王様キャラっぽいな」

「まあそこから高飛車的要素を弱め、暴力性と鞭を取り除いた感じのイメージかな」

女王様にデフォルトで鞭が付いていた事には驚きだが、デレをく

れないなんて果たして付き合っていける人間は存在するのかな。…
：脳の端っこが違和感を訴えている。頭を抱えて悩むが、違和感の
正体は掴めなかった。

「とりあえずだな、このツンツンというのを大いに体感してもらう
ためにショートストーリーを作っている。それを聞かせてやろう」

ちょっと偉そうな態度にいらついたが、正直気になるので無言に
よりその物語を語る事を頼斗へと促す。

「まあ登場人物の名前は、ツンツン役にアキラ、その彼氏に俺とし
よう」

「何故!？」

「その方がリアリティがあるかな、と。そう思うだろう?」

「まあそうだけど……。何か気に入らない」

本音を言えば冗談や創作でも頼斗の恋人という位置付けは勘弁し
て欲しい。

「では、俺の脳内劇場の始まり、始まり」

頼斗は、妄想という人類に授けられた最も穢れた力を全力で展開
させる。頼斗の妄想空間が、モヤモヤモヤという男子のみの教室を
彷彿とさせるおどましき擬音と共に世界を侵食した。

そして、頼斗はゆっくりとツンツン物語を紡ぎ出した。

＊

「そんなに一緒に帰りたいのなら、あたしの荷物をすべて持ちなさい！」

校門にてアキラは帰宅を共にしようとする頼斗に向かってそう言い放った。

「ああ、わかった」

頼斗がそう答えると、アキラは地面に転がしてある学生鞆と大量に荷物が詰まったスポーツバッグを指差して、頼斗へと運ぶように促した。

「んいしょっと！ うお！？ な、なんだこれ、何が入ってんだよ？」

学生鞆はなんなく持ち上げる事ができたが、スポーツバッグの方は異常に重かった。同姓の中で力がある方の頼斗であったが、持ち上げるのでやっとならであった。スポーツバッグがやたらと汚れていたのが気になったが、背中に背負わなくては到底歩く事などできそうにないので頼斗は渾身の力でアキラのスポーツバッグを背負った。

「なに？ あなたがあたしと帰りたいって言ったんでしょ？ それぐらいでへばってだらしないわね」

足元がふらつく頼斗を置いて、アキラはどんどん先を急いだ。

「ちょっと待って、もう少しだけペース落としてくれ」

搾り出すような声を聞いてアキラは後ろを振り返った。目に入っ
たのは、今にも荷物へと押し潰されそうな頼斗の姿だった。その情
けない姿にアキラは嘆息する。

「はあ……はあ……もう、無理……」

遂には足を止めてしまった頼斗にアキラは盛大に溜息をつくと、
一旦足を止めた。

「もう少し……ゆっくり歩いてくれ……」

アキラは呼吸を荒げる頼斗の姿を見てほくそ笑み、つかつかと苛
立たしげな足音を立てて引き返してきた。

「遅いわね、仕方ないわ」

「荷物持ってくれるのか？」

僅かな希望を抱いた頼斗は、顔を上げアキラの表情を窺った。そ
の顔には頼斗の期待する回答を示してくれるような優しさは宿って
いなかった。

「は？ あんた馬鹿？ 家に帰ってすぐ必要になるものだけバック
から出すのよ」

「えっ？ 他の荷物はどうすんだよ？」

そう訊くとアキラはあからさまに嫌悪の表情を浮かべ、止めの一
言を鋭く放った。

「あんたがあたしの家まで運ぶに決まってるでしょ！」

アキラをよく知る頼斗なので、当然そう言われるとわかっていた。しかし、わかっていても実際に言われるととても辛いものだ。頼斗は重過ぎる荷物をどう運ぶか解決策を考えたが、その間にアキラはバッグから必要な物を回収し終わり、帰路へと着いてしまっていた。

「ちょ、これ無理だつて！」

早足のアキラは歩みを止める気配は無い。

「知らないわよ。今日中に運んでよね。それじゃ」

「待てつて！　おい！　くそ……流石にこれを一人で運ぶのは無理だつて」

頼斗は悪いとは思ったが、遠ざかっていくアキラの背中を見送ってからスポーツバッグを開けてみた。一体何を入れればここまで重くなるものなのか不思議でならなかったのだ。それに、自分がこれほどの苦勞して運んでいるぐらいなのだから、アキラには到底持ち運ぶなど無理だと思えたのだ。頼斗はその謎も解明したかった。

「つてあれ！？　なんであいつ石なんて入れてんだよ！？」

とりあえず重さの原因と、アキラが持ち運びができた理由がわかった。アキラは頼斗が校門に現れるまでにバッグの中に石を詰めたのだ。だが、どうしてそんな事したのか理由は見当もつかなかった。いや、つく事にはついた。しかしそれは、遠回しな拒絶という悲しいものであった。

＊

頼斗はツンツン物語を語り終えると、ふいふと暢気に息をついた。

「……………」

「どうしたアキラ、顔色が悪いぞ？」

まるで挑発するように頼斗は言った。いや、挑発しているのだから。一体何を企んでいるんだ？　どうして今更あんな話をした？

ボクには頼斗がやろうとしている事がまるで推理できない。じりじりと人の精神をいたぶるのを好むような最低な性癖は持っていないかったと思うが……。

服の中でじつとりとへばり付くような汗が出ているのを感じた。

「頼斗……何が目的なんだ？」

5話 来客

ボクが鋭い眼光を浴びせると、まるで表情の浮かべ方を知らない人形のように頼斗の顔から一切の感情が消え失せた。

「別にただ新属性を見付けようとしているだけだが？」

わからない。ここに来て、更に頼斗という人間がわからなくなつた。

ボクは向かい合う席に座る頼斗を頼斗と認識できなくなった。頼斗によく似た何かだと思えてしまう。精神衛生上それが事実の方が嬉しいのは当然なのだが、そんな非科学的なものに頼って精神の安寧を図るほど落ちぶれてはいないつもりだ。

「正直に答えろ、頼斗……お前は——」

ボクの言葉を遮るように、背後で部屋の扉が勢いよく開かれる音がした。乱暴に開いたという雰囲気ではない、急いでいたのでつい力が入ってしまった、という感じだ。

頼斗の位置からなら誰が訪問して来たのかわかるはずなのに、何も言わず黙っていた。

ボクは若干の焦りを感じながらすぐに立ち上がり、後ろを振り返ろうとした。しかし、できなかった。何者かがボクの体を後ろから抱き締めてきていた。ギュッと力を込めて、身動きを取らせてくれない。

「後ろに居るのは誰？」

抱き付くだけでそれ以上何もしてこないのでも少しづつ落ち着きを取り戻し始めていたボクだったが、背中に押し当てられた二つの感触を察知し再び冷静さを失った。こ、これは……姫野さん並みのナイスバディ。不味いぞ、こんな状況なのに涎が垂れる。

「……………笹風さん」

背中に押し付けられた口がボクの名を呼んだ。どこかで聞いた事がある声。いつか妄想した感触。二つが見事に合わさり、ボクは抱き付いてきた謎の訪問者の正体に気付けた。

「ど、どうしたの姫野さん？」

間違いなく姫野さんだ。

「笹風さん……私、素直になろうと思うんです……」

「素直になる……？」

突然の訪問、唐突な言葉、ボクはまるで急展開について行けない。頼斗の顔を見ると、ニヤニヤしながらボクと姫野さんのやり取りを生暖かい目で見守っていた。

「はい……」

今にも消え入りそうな声だった。不安に怯えるのを堪えて搾り出したような声だった。

「何に素直になるの？」

突然の出来事だったので中々思考が回るのに時間が掛かったが、抱き付いたまま会話を続行しているのはなんとも奇妙な気分がした。しかしそれについて訊くのはいかにも無粋な雰囲気であるし、ボク自身姫野さんが許す限りそのたわわな二つの実を押し当てたままにしていってもらいたい。

「自分の想い——気持ちにです」

「どんな気持ち？」

「……………恋心です」

「えっ？」

なんだろうか、この娘を嫁に出してしまう父親の心境は……。お腹の方まで回された両手が、まるでボクを見失わないように、手放さないようにギュッと力を強めた。胸がどうか考えている余裕が——ああ、すごい、背中に押し当てられて形を変えていく——あるみたいだ。

「私……私は、笹風さんの事が……好きなんです」

「……………はい？」と呆けるボク。

「あっはっはっはっは、おめでとうアキラ！」と盛大な拍手を送る頼斗。

えっと、あれ？ 姫野さんがボクの事を好き、という事でよろしいでしょうか？ あはは、そうかそうか。姫野さんはボクが好きなのか。へへすごいビックリだね。

「なんだってええええええええええっ!？」

ボクの絶叫が木霊する。山に向かって発したのなら山彦が十回は返って来たに違いない。いや、今はそんな事はどうでもいいんだ。

「ちょっと待ってよ! ボクさ、まるで展開に付いていけないよ? ねえ頼斗、これはなんのドッキリなの? そろそろどこかで映像を見ている人がプラカード持って出てくるタイミングだよね?」

今だ抱き付いたままの姫野さんを振り回す激しい身振り手振りで、ボクは頼斗へと訴えた。もう流石に胸の事は——すごい、背中ではズミカルに揺れてよりリアルな感触が伝わってくるよ——意識せずにはいられない。

「アキラ、少しは落ち着け、胸がどうたらって意味がわからないぞ?」

不味い、喜びの余りに口に出してしまっていたか……。

「あ、あのあの……笹風さんは、私の事……どう思いますか?」

「えっ?」

わざとハイテンションでそれから逃げていたのだが、やはりそうはいかないみたいだ。乙女の純情と漢の戦いからは逃げるなど昔から言うからな。

「答えを聞かせてください。お願いします」

「姫野さん……」

胸がキュツと苦しくなる。ボクはこんな場面に覚えがあった。今では大きな後悔の一つだ。だからわかる。中途半端な答えを相手は望んでいないし、自分自身も酷く後悔する結果になることを。

さあ、言うんだ。姫野さんへ自分の気持ちを逃げずにしっかりと伝えるんだ。

「ボクは、ボクには、ごめんなさい……。ボクにとって姫野さんはやっぱり友達だよ」

背中から柔らかい感触が消える。寂しげ足音と、すすり泣く声が後ろから聞こえてくる。

「そう……ですか」

ボクには振り返る勇気が無かった。

事の成り行きを黙って見守っていた頼斗が、椅子から立ち上がり、ボクの背後へと回った。どうやら姫野さんに何か伝えているようだ。頼むから余計な事は言わないでくれ。

頼斗と姫野さんの囁きを盗み聞きしようと思ったが、中々聞き取れない。しかし振り返り向く勇気は無い。

「笹風さんっ！」

待つ事数分、背後から元気な声が飛んできた。頼斗、何をやったのかはわからないが姫野さんの元気を取り戻してくれたんだな。やっぱり、どう変人になっても本質は変わらないんだね。ボクは懐かしの頼斗の姿を垣間見た気がした。

気まずい雰囲気にはなる事が無いだろうと安心したボクは振り返

る勇気を得た。

「私！ 立派なメイドになりますねっ！ ご主人様！」

「は、はいいいいいっ!？」

ボクはすぐに振り返った。確かに元気を取り戻した姫野さんが居た。オマケでまたニヤニヤ気色悪い笑みを浮かべている頼斗が壁にもたれて立っている。

姫野さんは瞳に煌々とした光を宿し、ボクを見つめていた。その瞳には真っ直ぐで、一切の迷いが感じられなかった。

「ご主人様に恥を欠かせないためにも、頑張って礼儀作法を身につけますね！」

「えっ、あっ、その……」

姫野さんはスカートの裾を摘んで優雅なお辞儀をすると、スキップで部屋から出て行ってしまった。追う気力は無かった。それに、頼斗へと話を訊く事が先決だ。

「頼斗……お前、姫野さんに一体何をした？」

頼斗は壁に背中をあずけたまま腕を組んで、目を瞑った。

「アキラはメイド好きであると助言しただけだぞ」

「……………」

少しでも昔の頼斗を垣間見た気がした自分が恨めしい。

「まあそんな恐い顔をするな。一応は助け舟になっていただろう？」

確かに救われた気がするが、後の苦労を考えると頭が痛くなる。
今日は厄日なのだろうか？もう姫野さんの胸の感触を味わった至福の時間が忘却の彼方へと消えてしまった。

「あはは、もういいよ。新属性について考えようよ。うん、そうしよう」

「現実逃避に興じるという選択肢を取ったか……」

なんとでも言え。ボクだって辛い現実から目を背けたい時だってある。

ボクはただ現実から目を背けるためだけに新属性についての会議を再開させた訳ではない。頼斗がこの新属性というものを介して何か企んでいるのは明白だ。その企みを暴くためにボクは会議を再開させるのだ。

椅子へと座り直したボクは、今だ姫野さんの告白を断った事により沈痛な面持ちをキープしている。逆に頼斗は達成感に満ち溢れた、実に幸せそうな面をしていた。

「頼斗、次の新属性はなに？」

ボクが声を掛けると、頼斗は更に瞳の輝きを増させ二度頷いた。

「うんうん、遂にアキラもやる気が出てきたか。いいだろう。次にかいこうか」

頼斗はメモ帳を見て気味の悪い笑みを零した。嫌な予感がする。

「ふっふっふっふ……。アキラよ、次はツンツン以上の力作だ！」

ツンツンのどこが力作だったのかとても謎である。いや、価値観とは人それぞれか、口出しはするまい。それが大人のマナーだ。

「勿体つけなくていいからさっさと見え」

「わかったわかった、そんなクリスマスプレゼントを前にしておあずけくらったような子どもの顔をするな」

そんな顔はしていない。もしそう見えるなら早急に眼科へと行くべきだ。それで解決できないようであれば精神科へと行く事をおすすめしよう。

ボクは苛々ゲージが上昇し、頬の筋肉がピクピクと震えるのを感じた。噴火五秒前なボクの怒りのオーラに気付いたのか、頼斗は一度咳払いをすると早々に語り出した。

「次の新属性は、『口下手ツンデレ』だ！」

「長いな。口下手のツンデレ？ それは、そんなにいいものなのか？」

「ふっ、もちろんだ。これにもショートストーリーが用意されている。それを今から聞かせてやろう。例によって、ツンデレ役はアキ

ラで、その彼氏役に俺だ」

「……………是非聞かせてくれ」

次はどんな話をするつもりだ頼斗。何が目的かはわからないが、受けて立ってやる。ボクは逃げも隠れもしないさ。

ボクが決意を表情へと表すと、頼斗はそれを確認し、ゆっくりと妄想を紡ぎ始めた。

＊

「頼斗、い、一緒にかえ、帰りなしゃいよっ！ あ、違う、帰りなさいよっ！」

頼斗が下駄箱で靴を履き替えていると、後ろから妙に安定感の無い声が聞こえてきた。聞き慣れた声にセリフ、頼斗は苦笑しながら後ろを振り返った。

「もちろんいいよ」

あんなてんぱった命令形の言葉を使うのは頼斗の記憶ではアキラ以外居ない。だから振り返ればそこには当然のようにアキラが眉を吊り上げ怒ったような表情で仁王立ちをしているのだ。

「な、なにニヤニヤしてるのよっ。ただ荷物を持ってもらいたいだけなんだからね。こ、このへ、へんひゃい！」

下駄箱から靴を取り出したアキラは、ニヤつく頼斗を非難した。

しかし、それは持ち前の舌の回りの悪さで逆に笑いを誘うものになっ
てしまっていた。

「……へんひゃい？」

聞き取れなかった風を装って頼斗は首を傾げる。

「ち、違うっ！ 変態って言ったの！」

アキラは顔をカーツと赤くし激昂した。拳をブンブン振って威嚇
する。そんな姿がまた頼斗を楽しませてしまっている事にアキラは
気付かない。

二人は外履きへと履き替え、並んで歩き始めた。荷物は頼斗がア
キラの分も一人で持っている。荷物といっても学生鞆が一つ増える
だけの事だ。

「そういえば駅前に行ってパフェおごるって約束してただろ？ ご
めんな、今日さ、すぐに家に帰らなきゃならなくなっただよ」

からかわれた事でツンとした態度を続けていたアキラだったが、
頼斗の言葉を受けて急にしおらしくなった。

「え、ええ、そ、そんな……。約束……。あの、その、そ、それじゃ
あ、また、えっと……」

素直になれない気持ちと、口下手が相まってる的確な言葉が中々出
てこずアキラは苦戦した。そんなアキラを見て、頼斗は微笑を浮か
べて言った。

「大丈夫だよ。また今度、だろ？」

長い付き合いなのだ、アキラが言わんとすることは大体想像がつくのである。しかし、フォローは入れることが出来ても、アキラのツンスイッチが入るタイミングまでは把握し切れていなかった。

「なっ!？」　　そ、そんな事言おうとしてないわよっ!」

目を剥き怒り出すアキラを見て、頼斗は内心で素直じゃないな、と呟きながらひょうひょうとした態度を取った。

「はいはい」

ツンモードになってしまったら何を言っても無駄だと経験上理解している頼斗は、軽く流した。しかし、これもまたアキラで遊ぶ手段の一つである。

アキラは悔しそうに低く唸った。拳を作り怒りに震えさせる。しかし暴力を行使する気にはなれない。殴ってやりたいのに殴れない。そのもどかしさが胸をキュッと締め付けた。

「ううう、頼斗の馬鹿!　もう知らない!」

結局は怒鳴る事で僅かな反抗をする事しかできなかった。

＊

口下手ツンデレ劇場が終わり、頼斗はツンツン物語を語り終わった時のように楽し気に息をついた。ボクは最後まで半分放心状態で話を聞いた。頼斗が語り終わった後、思考がまとまらない間、全身

が凍りつくような悪寒を味わい、そして沸々と煮えたぎるマグマの
ような感情が氷を溶かすように全身へと浸透していった。

6話 襲撃

「ら、ららら、頼斗おおおっ!? い、一体、な、なな、何を企
んでる!? ボクをいじめて楽しいのか? そんなに楽しいのか?」

「凄く、楽しいです」

昼間の公園でブランコに乗るおっさんのようなどこか諦観の境地
へと至った笑顔で、頼斗は答えた。もう死ぬ覚悟ができている、と
も言いたげに頼斗は口元を緩ませた。

死ぬ覚悟ができているのなら容赦なくやってやろう。よくもまあ
ボクをここまで辱めてくれたものだ。

「頼斗、もう何が目的だったのかはどうでもいい。即刻、死ね!
いや、殺す!」

「きゃー怖い。少年誌では出せない凶悪な笑顔だね」

ここに来て、まだボクをからかうか。そんなに死にたいのならお
望み通りにしてやろう。

ボクは正面からではなく机を迂回し頼斗の横に立った。頼斗は瞼
を閉じる事で、自分の運命をボクの采配へと委ねる、というのを示
した。

「どうしてボクを怒らせるような真似を――」

頼斗の胸倉を掴んでやろうと思ったその刹那、記憶にあるおぞま
しい威圧を感じた。部屋内ではない。廊下、それも、ドアのすぐ側。

「どうしたアキラ？」

「ドアの向こうに誰か居る」

ボクは頼斗から視線を外し、ドアの方へと集中した。抜き足、差し足、千鳥足……って酔っ払ってどうする。とにかく細心の注意を払い、ボクはドアへと接近していった。

「誰かって、誰だよ？」

ぼけぼけな頼斗が声を掛けてきたと同時に、勢いよくドアは開かれた。ドアは目一杯に開き、それでも掛けられた力は消費し切らず、壁へとぶつかり、反作用により逆走を始めた。勢いが殺され切れないうの想像に入れていなかったのか、謎の訪問者は前へと進み、ドアの特攻をもろに喰らっていた。

「きゃっ！」

「……………あ」

ボクはなすすべもなく、訪問者がドアの直撃を受けるのを見ていた。見事なクリーンヒットであった。

「ううう……はにやが、はにやがあ」

ドアの向こう側から定番のセリフが聞こえてきた。やっぱり鼻にヒットしたらしい。

「あの、大丈夫ですか？」

ボクは声から訪問者は女性であると判断し、すぐにドアを開け放ち、助けに行った。紳士を目指す者は常に女性には優しくである。

「だ、大丈夫です」

廊下には、美女がいわゆる女の子座りという体勢で鼻をさすっていた。癖が一切無い流れるようなストレートヘアは座った状態で床につくほどの長さがあった。

「あれ？ 三須先輩ではないですか。どうしたんですか？」

ボクの肩口から顔を覗かせた頼斗が、廊下の赤鼻の美女に向かってそう言った。

ちよつと待て。頼斗はなんと言った？ 確か三須、先輩と言ったような。三須……？ どこかで聞いた事があるような気がする。

ボクが答えに辿り着くよりも早く、赤鼻の美女は動いた。物音を一つ立たせず、無造作に立ち上がり、背中へと手を回した。

不味い、と思った。背中に戻された手が握るのは、本来は台所や調理室にあるもの。ギリりと鈍い光を宿す身近な凶器。それが今まさに、ボクらへと牙を剥こうとしている。

「頼斗、さがれっ！」

無駄とはわかっていてもボクは叫んだ。やはり頼斗の位置からでは包丁が確認できないのか、まだ暢気な様子を見せている。

「なんで？」

案の定首を傾げる頼斗をボクは容赦無く突き飛ばした。頼斗は突

然の衝撃に受身を取る事ができず、床へと転がった。低い呻き声が聞こえた気がするが、優先すべきは目の前の赤鼻の美女、いや、何度も頼斗へと挑んではそのたびに玉砕みすまいしていた不憫な先輩、そして……ヤンデレへと変貌した三須真衣先輩だ。

「あなたが……」

「え?」

ユラリと前屈みになった三須先輩が何かを呟いた気がした。しかし、ハッキリと聞き取る事ができなかった。何を言おうとしていたのか、それを考えようとするも、その時間を三須先輩は与えてくれなかった。

逡巡の隙を突くように銀色の一閃が、ボクの胸元をかすめた。ほぼ無意識の内に後ろへと引いていたので助かった。回避行動が遅れていたらと思うと、慄然とし全身が震えた。

「あなたが、頼斗くんを……。あなたがああああっ!」

「くっ!」

乱暴な追撃は、冷静になったボクにはなんとか見切れた。ブンブンと包丁を振り回す三須先輩をかわしつつ、ボクは部屋内へと誘い込んだ。丸腰で刃物を所有する者に挑むのは無謀過ぎる。それなりの修羅場を潜り抜けてきていたボクは、とにかくマシンのように冷徹な思考を展開させた。

「あなたさえ……どうして、あなたさえ!」

もう三須先輩にはボクしか見えていない。ヤンデレとの対峙か…

…。ボクのスクールデイズも中々にスリル満点だ。

目の前の三須先輩を警戒し、床に転がる頼斗に注意を払いつつ、ボクは後退を続ける。目指す先は掃除に使ったほうきが置かれた、埃まみれの机だ。

一秒がとても長く感じられる。生死が交錯するこの限定空間は、何度味わっても慣れないものだ。緊張で溢れる汗が鬱陶しくて仕方がない。呼吸を整えようと幾ら思っても逆に過呼吸にでもなってしまう。そんなほど安定感を失い、吐き出す息は熱を増していく。それと共に体内は炎を封じ込めたみたいに際限なく熱くなっていく。

「大人しくわたしに殺されなさいっ！」

大きなモーション。両手で握った包丁を勢いよく突き出した。ボクはそれを難なくかわし、一気に後ろへと下がった。やっとの事で目的地に辿り着く事ができた。

ボクは机に置かれていたほうきを手に取り、体の正面で構える。リーチはこちらのがあるが、殺傷能力など殺人への実用性は遥かに向こうの得物が凌駕している。だが、棒切れ一本でも戦況とは変わるものなのだ。なんといっても刃物との肉体での直接接触を避けることができるのだから。

三須先輩の表情は長い前髪のせいで窥えない。口元がもごもごと動くのだけは確認できた。きっと呪いの言葉を呟いているのだろう。じりじりと間合いを詰めながら、ボクは三須先輩の説得を試みる事にした。

「三須先輩、止めてください！　ボクを殺したところでなんの意味もありません！」

口での返答は無く、容赦のない包丁の攻撃で答えてくれた。首を狙った突きをボクはほうきでいなし、進路を変えた。勢いをつけ過ぎたのか、三須先輩は前のめりにバランスを崩した。包丁はボクの右肩すれすれを通過し、三須先輩の体はボクの体に飛び込んできた。

「うわぁっ!？」

タックルを警戒したが、それは無くただ倒れ込んできた。ボクは押し倒されないように足を踏ん張らせた。その間にほうきを投げ捨てる。包丁は容赦無くボクの背中を捉えている。既に一刻の猶予も無い。

ボクは決心し、三須先輩の腹に掌底を放った。

「ううっ!」

呻き声を上げ、腹への衝撃で三須先輩は包丁を床へと落とした。木造の床へと突き刺さる際に包丁は歪な音を立てた。それが鼓膜をぞわぞわとくすぐり、背筋が粟立った。

「どうして……どうしてえっ!」

三須先輩の最後の咆哮が上がる。それなりの強さで腹へと打撃を加えたので、もう素手で挑んできたとしても大した脅威ではない。

しかし、ボクの一瞬の油断はまさに命取りとなった。ジジジ、と三須先輩の左手が入れたポケットの方から気味の悪い音がした。それはまるで、カッターナイフの刃を出す音に酷似していた。

「うわぁぁぁぁっ!」

耳を劈く絶叫が襲う。揉み合いをする距離、バックステップをし

ようにも空いた右手がボクを逃がすまいと肩をまるで万力のような強さで掴んでいる。

ポケットから出されるカッターナイフは包丁と同じく怪しい光を帯びていた。

ああ、ボクは死ぬのか……。恐怖は感じない。ただなんとなく、寂しい。

最後の抵抗として、無意味とわかっていてもボクは反射的に両手で顔を覆いガードした。眼前に迫るカッターナイフは一秒を細かく分けた時間の中を進み、ゆっくりとボクに死を運びにくる。

「三須先輩、流石にやり過ぎですよ」

死を悟ったボクだったが、ギリギリのところで頼斗の屈強な手が、それを阻んだ。ボクと三須先輩の間に割って入り、カッターナイフを持つ手を掴んだのだ。

「頼斗……」

三須先輩を見据える頼斗の横顔には、昔の姿が重なって見えた。

「どうして……どうしてなの！？ どうしてわたしじゃダメなのっ！？」

三須先輩はカッターナイフを床に捨てると、頼斗の胸元をポカポカと叩いて、涙した。

「単純な話です。貴女が、タイプじゃないからですよ……」

三須先輩は頼斗の拒絶を受け、絶望したのか全身を弛緩し床に崩

れた。

「ああ……あああ、ああああああつ！」

床に倒れ付し、号泣する三須先輩を見ていると胸が搔き窺われるような痛みを感じた。たとえ何度見ても慣れるものではない。目の前で泣く少女の姿は、ある日の誰かと同じものなのだ。頼斗と関わるということ者の姿はよく見る。

「大丈夫か、アキラ」

「ボクは大丈夫」

頼斗の心配する声に言葉を返し、ボクは三須先輩に憐憫の眼差しを送った。そうすると横に立つ頼斗が肩をすくめて溜息を零した。

「三須先輩はお前を殺そうとしたんだぞ？」

「だからどうした」

頼斗が決して薄情な訳ではないと思う。きっとボクが変なんだ。これから行うのは偽善なのだろう。でも、せずにはいられない。ボクは傍に座り込み、ポケットからハンカチを取り出して、三須先輩へと差し出した。

「使ってください」

長い前髪の間から覗く真っ赤に充血した瞳が驚きで見開かれた。

「どうして……わたしは……あなたを……」

「気にしないでください」

ボクは安心させるためにできる限りで最上のスマイルを浮かべる。

「ううう、ありがとうございますっ」

三須先輩はハンカチを受け取ってくれた。ハンカチを目元に当てながら、

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

と壊れたレコーダーのように繰り返した。やっぱり三須先輩は悪い人ではないんだ。

「大丈夫です、悪いのは頼斗ですから」

ボクが慰めの言葉を掛けていると、頼斗は少し離れた位置の壁にもたれてズボンのポケットから携帯を取り出した。そして手早く操作し耳に当てる。

「あ、警察の方ですか――」

「ちょ、待てっ!」

ボクは芸人も顔負けな突っ込みのモーションと共にすぐさま制止を掛けた。

「え? なに?」

頼斗は目を丸くしキョトンとしている。

「なに、じゃなくて！ それはないだろう」

語気を荒げそう言い放つと、頼斗はさも当然だと言いたげに鼻で笑った。

「傷害未遂、銃刀法違反、別に警察を呼んでも――」

「そういう問題じゃないっ！ なにもそこまでしなくていいだろう？」

「ふっ、俺はアキラのためなら神にでも悪魔にでもなれるっ！」

「ならんでいいからっ！ ったく」

しょうがないなと暢気に呟いて、頼斗は携帯をポケットに仕舞った。それを確認してから、ボクはすぐに三須先輩の方を向き直った。

「うわっ！」

急に三須先輩が抱き付いてきた。しかも、なんか目がキラキラと輝いている。

「ど、どどどうしたんですか三須先輩！？」

「真衣と呼んでください！ お兄様！」

「はい？」

姫野さんに続いて三須先輩まで壊れてしまった。なんなんだ一体。それにしてもお兄様ってどういう意味なんだろう。

「お兄様、わたしをあんな必死になって助けてくださってありがとうございますっ！」

「なんでお兄様？ どうしてお兄様？」

更に密着してくる三須先輩。胸が押し付けられて苦しい。いや、嬉しい。ってそうじゃないそうじゃない。

「お兄様はお兄様だからお兄様なんです！」

いや、意味がわかりません。まさか長期間にも及ぶ頼斗の毒電波を浴び続けた結果、言語障害を引き起こしてしまったのだろうか。もしそうだとしたら憐れでならない。

「良かったなアキラ！ 立派なお兄様になるんだぞ」

頼斗はどこか複雑な面持ちでボクたちを見ていた。頼斗には珍しいどこか判然としない表情にボクは微かな戸惑いを覚えた。

それから、二十分ほどの時間を要してボクはしがみ付いてくる三須先輩を引き剥がす事に成功した。今日はどうやら厄日らしい。あれもこれもすべて頼斗のせいだ。

最終話 邂逅

ボクと頼斗は椅子へと座り向かい合った。三須先輩は既に退室している。

頼斗は余裕を感じる柔和な眼差しを、椅子に座ってからずっとボクへと向けてきている。

「頼斗……お前は何をやろうとしている？」

恐れを知らないピッチャーのようにボクは直球ど真ん中へと放った。

「もう気付いていると思ったが、俺はアキラを買い被り過ぎていたか？」

ボクの投球に対する頼斗のバッティングはまるで探り合いの見送りであった。

「もう御託はいい。言い訳できないようにもっと具体的に訊いてやろう。どうして過去の話を新属性と称してボクへと聞かせた？ それに姫野さんや三須先輩の寸劇はなんだ？ ボクを弄ぶのがそんなに楽しいのか？」

厳しい口調で追及していくと、頼斗はぼつが悪い顔で俯いてしまった。

「アキラ……。お前なら気付いてくれていると思っていただけだな。残念だよ」

「何に気付けど？」

「俺の口からは言いたくない。自分自身で気付いてもらいたい。だけどヒントぐらいならあげても構わない」

「そのヒントとやらをもらおう。下らない理由でこんな事をやっていたとわかったのなら、ボクは容赦無くお前を殴り飛ばすぞ」

「好きにしろ」

さっきまでの無駄なハイテンションや含みのある笑みなどは一切消え、迷子になってしまった子どものように目を熱くさせボクを見詰めていた。その態度の豹変の意味がボクにはまるでわからなかった。

頼斗は机に両肘をつけて、右手の甲を顎に当てた。

「最初に言うが、姫野や三須先輩の訪問は俺が仕組んだものだが、それ以上の事はしていない。姫野の恋心は本人が抱いたものだし、三須先輩がお前を好きだったのもそうだ」

「好きだったってどういう意味？ 好きになったじゃないの？」

呆れたように頼斗は左手を額に当てた。

「三須先輩は最初からお前目当てで俺に関わっていた。俺への告白はお前へと近付くための手段だ。さっきの暴走だって、ヤンデレ的な思考の結果、殺して他の人には渡さないという目的だったんだよ。俺にもあれは流石に予想外だった。危険な目にあわせてしまっただけだと思ってる。……まあとりあえず、三須先輩の言葉を思い出し、お前へと向けられた言葉とも解釈できるだろう？ あんな

刃物をブンブン振り回されては冷静に対応はできなかっただろうけど、どれ一つとして俺に向けられた言葉は無かった」

頼斗は何を言っているんだ。三須先輩が好きなのは最初からボクだった？

「そんな顔をしているようじゃ、やっぱり自覚は無かったんだな。実際にまともな会話をしたのは今日が初めてだしな。仕方ないか」

勝手に話を進めるんじゃない。なんだこのどんでん返しの展開は？

「頼斗、次は姫野さんの事だけど……あれは演技なんかじゃなく、本気だったと？」

雰囲気から察するにボクもそう思った。だけどまだ納得し切れてはいない。

頼斗は苦笑し、視線を宙に少し彷徨わせてから、ボクの目を見た。

「姫野も可哀想な奴だよ。あんなに健気に恋してたのに、まるで氣付いてもらえていなかった。俺には姫野の気持ちがよくわかるよ。まあ姫野の告白をOKしなくてよかったよ」

「……………そう。それじゃあどうして過去の話聞かせた？」

ボクが訊くと、頼斗はスッと目の色を変えた。真剣みを帯びた闇色の瞳は、濁った輝きを宿していた。

「新属性の話が俺たちの過去の話だと気付けてもらえただけで万々歳だね。何故聞かせたか、それは単純に思い出してもらいたかったからさ。思い出を、抱いていた思いを」

愁いを帯びた瞳で頼斗は天井を仰いだ。その姿が小学校時代に一緒に星を見上げた頼斗の姿とダブった。電波キャラと成り果てた現在の頼斗の姿の方がかすれて見える。

頼斗と目が合う。懐かしさに全身が震えた。あどけない笑みが、ボクに語り掛けてくる。愛おしさが込み上げてくるのと同時に心の奥底で恐怖が加速した。

「姫野の告白で思い出しただろう？ あの時のを聞かせてもらおうか」

「……ッッ！」

緊張で口内が一瞬で砂漠地帯と化した。紡ぐ言葉が浮かばない。ただひたすらに心が願う。ここから逃げたい、と。

ボクの願いが届いたのか、古臭いチャイムの音が下校時間を伝えた。

「ボクは……その、もう時間だから、帰る」

答えを待つ頼斗から逃げるためボクは帰宅を強行した。椅子を引き、立ち上がってドアへと駆ける。ドアノブに手を伸ばす。だけど、届かなかった。立派に成長してしまった手長猿の腕が、ボクを後ろから抱きすくめてきた。

「放せっ、ボクは時間を守る人間なんだよ」

「ちよい黙ってろ。俺は、お前に聞かせたい話がある。ちよつとした昔話だ」

大人びた声を耳元で囁かれ、不覚にもドキリとした。心臓が騒がしいほどに強く脈動する。更には有無を言わせまいと、頼斗は力強くボクを抱き寄せた。

「そんな話に興味は無い。だからさっさと放せ、この変態っ！」

「おいしいね、昔の調子が出てきてるよ。残念ながら、この話は最後まで聞いてもらう。なんてたってこの話が今日のメインディッシュだからな」

また更に腕の力を強めた。力の差を思い知ったボクは、抵抗するのも馬鹿げてきたので、もういつそどうにでもなれ、と頼斗へと体を預けた。急に力が抜けたので拍子抜けした様子の頼斗であったが、ボクの行動の意味に気付くと満足そうに笑みを作った。

「しおらしいアキラも中々だな。んじゃ、本日のメインディッシュを語るとしますか」

くう……なんという屈辱。後で殴る。顔の形が変形するぐらいにぼこぼこにしてやる。

「あるところにAが居ました。Aは、Bととても仲良しでした。最初こそBの態度は冷たかったもののAの必死の努力により少しずつ受け入れてもらえたのです。それから月日は流れAは遠くへと引越す事になりました。

Aは、Bの事がとても好きでした。なので離れ離れになる前にその思いを伝えました。しかしBからの答えをもらえないままAは別れを迎える事になってしまいました。だからAは、もしも再会できる日が訪れるのなら、再び変わらない気持ちを伝えよう、と心に誓

いました。

それからです、Aは人が避けるような不思議な行動を取るようになりしました。新属性を欲している！と妄言を叫び出したり、奇行をなしたりしました。他者からの関心を避ける事で、Aは、ただただBへの変わらない気持ちを抱き続けようとしたのです」

頼斗は一度息をついた。吐息がボクの髪のをくすぐり、その触感が伝播し全身の緊張が高まった。

「やがてAは、Bと過ごした故郷へと舞い戻り、悠橋学園へと入学しました。この学園でもBへの気持ちを守り切るために、代表生徒の言葉にて、また妄言を叫ぼうと決めました。しかし、会場に入ると際にAはBの姿を見付けました。驚愕すると共に、全身が歓喜に震え上がりました。それと共に、さっきまでなんとも無かったはずの緊張を急に感じ始めました。自分の名を呼ばれ、Aはカチカチになった体を引きずって壇上へと上がりました。

入学式が終わり、Aは再会の喜びを噛み締めてBへと会いにいきました。しかし、期待は脆くも崩れ去りました。

Bはまるで変わってしまったのです。ですが、ある日気付きました。もしかしたらBはただ昔の記憶を忘れていただけなのかもしれない。

だからAは、Bへと新属性の想像といって、昔の思い出を聞かせてみました。果たしてAの気持ちはBへと届いたのでしょうか？」

ボクは長い沈黙を挟んでから口を開いた。

「なんだその自慢話は？ Aは凄く頑張ってたんだね、って言うてもらいたいのか？ ふざけるなっ！」

中々開放してくれない頼斗の鳩尾を肘で正確に突き、ボクは両腕の戒めから抜け出した。腰を曲げて苦しみに悶える頼斗を見下しながら僕は憎々しい声で――呪詛を紡ぐように――語り出した。

「あるところにBとAが居ました。二人は離れ離れになる事になりました。その時、BはAから思いを伝えられました。離れた相手を思い続けられるほど自分は強くないと自覚していたので、素直な気持ちを出さず曖昧にしそのまま別れを告げました。

それからBは、強くなってもしAにまた出会えたなら、今度こそ答えてあげよう。そう心に誓いました。BはAへの気持ちを忘れないためにも、面倒臭がりな性格を悪化させ、他人との関わりを断ちました。

悠橋学園に入学した時、Bに奇跡が起きました。ずっと後悔していた記憶を払拭するチャンスを得られたのです。Aとの再会です。しかしAはすっかり変わってしまっていて、かつての面影を感じる事ができませんでした。

それからは絶望の毎日でした。何かの間違いなのだろう、とAをこそそこそとついたり、それとなく周りに探りを入れてみたりしました。そういう行動はAを追う女子たちから誤解を受けるのか、何度かBは危険な目に遭いました。入学し幾らか月日が流れると、Aが突然話し掛けてきました。Bは適当に対応していく内に再びAと行動を共にするようになりました。でもやはりAに昔のAは感じる事ができませんでした」

ボクは一気に語り切った。溜め込んだ思いを解き放つと、溜飲が下がる思いがした。

「アキラ……」

腹痛を耐え切った頼斗が、どこか呆然とし立ち尽くしていた。

「帰る……」

それだけを言い、頼斗へと背中を向ける。

目元にじんわりと広がる熱が涙となり、頬を伝い、顎のラインを這い床へと落ちていく。

ボクたちはどこまでも馬鹿だった。ずっと変わらない気持ちを抱き続けていたのだ。

ドアノブに手を掛け、ボクは静かに響く頼斗の呼び声を無視し、部屋を後にした。下校時刻を過ぎた事もあり、元々人が余り訪れない特別棟の三階の廊下には静謐としどこか厳格な空気が漂っていた。そんな重々しい空気を切り裂くようにボクは一步ずつ確かめるように歩いた。

最終話 邂逅（後書き）

次のエピローグにて物語は完結です。

こんな拙作ですが、もう少しお付き合いしてくださいと嬉しい限りです。

エピソード 求萌

「アキラ！ 待て、あの日の答えを聞かせてくれっ！」

背後から放たれた頼斗の叫びは、充満する空気をいとも容易く貫いて、ボクの耳へと運ばれた。荒げる呼吸音が迫ってくる。ボクはそれに制止を掛けるために後ろを振り返った。

「ボクは頼斗が求めるような新属性など持ち合わせてないよ」

冷たく言い放つ。声が裏返ってしまっているし、情けなく震えていたのではほとんど拒絶する雰囲気は醸し出せなかった。

頼斗の顔がくしゃりと歪んだ。ボクから距離を少し開けたところで足を止めた。

「そんな事は……どうでもいいんだよ。アキラへの気持ちを守るために使ってた言い訳なんだから。アキラ、頼む、あの日の答えを聞かせてくれ！」

「だから、ボクは頼斗が求めるような存在じゃない。それに、言い訳といっても十分に楽しんでいただろう？ あれが嘘だとは思えない。そして、ボクには新属性なんて無い」

「あああ、もうっ！ どうしてそう素直じゃないんだっ！ わかった、新属性があればいいんだろう？ なら、アキラは新属性を持っているさ！ その名も、『グーデレ』だ！」

「ぐーでれ？」

「ああ、そうだ。普段はぐだぐだと行動が遅く、いつもぼーっとしているけど、好きな人と二人つきりになるとデレてくる！ まさしくグーデレ！ これでいいだろう？」

必死になって馬鹿みたいだ。それに、グーデレってぐーたらの間違いじゃないか？

ボクは答えを求める頼斗を一瞥し、再び背を向けた。ゆっくりと歩を刻む。

「……アキラ、俺の事……もう好きじゃないのか？ やっぱり、あんな奇行を続けたせいで幻滅しちゃったのか？」

涙ぐむ声を聞いてもボクは足を止めなかった。だけど口が勝手に動いた。まるで帰宅の時に発生する条件反射のように。

「頼斗、ボクと一緒に帰りたいなら荷物持ってよ……昔みたいになさ」

「え？」

「それと、ずっとそのままだったパフェも奢ってよ。それから――」

「わかった。約束はすべて果たすよ。……アキラ、ありがとう」

本当にボクは何をやっているのだろうか。血迷ったのかな？ それとも毒電波にやられちゃったかな。どちらでもいいか。

耳に響く頼斗の駆け寄る足音が心地良い。

ボクは懐かしの記憶の中で弛みながら、フツと笑みを零した。

頼斗は約束を守った。そう、絶対に後悔させないと言ったのを見事果たしたのだ。

帰り道は手を繋いで歩いた。

無言の歩みの中には、離れ離れになった空白の日々を埋める心地良い沈黙が存在した。

馬鹿げた擦れ違いの日々は幕を閉じる。

そういえば立派なメイドになると宣言した姫野さんや、お兄様と慕ってくる三須先輩への対応はどうしようかな。……今は余り深く考えなくていいか。どんな答えを出せばいいのか今一わからないしね。とりあえず頼斗を殴っておこう。

明日の登校には、入学式以来クローゼットの中で眠り続けていたスカートを穿いていこうと思う。さて、頼斗の反応が楽しみだ。

エピローグ 求萌（後書き）

これにて完結です。

原稿用紙100枚の物語、という事で書いたので……一応は短編？
なのでしょいか。中途半端かもしれませんが、正直にいえばこれ以降の展開は一切考えていないので、完結でいいのかなと思っています。

ちなみに、最初の段階は思った以上に長くなってしまい、一万文字ぐらい削りました。その八割がアキラのリアクションによるネタだったので、電波具合が倍以上でした。

……やっぱり二人のその後や、百合ロードを爆走し出したロリやヤンデレのお二人のその後などは気になったりするものですか？
要望があれば番外編……書くかもしれません。

こんな作品でも少しでも楽しんでもらえたなら幸いです。

ここまで読んでくださった読者様方にお礼を申し上げます、筆を置くとします（まあキーボードですけどね）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1044j/>

求める萌えはきみに

2010年10月17日02時22分発行